定本聊齋志異 卷五

定本姚鼐志異卷

定本 聊齋志異 全六卷

五卷

昭和三十年十一月二十五日 初版印刷
昭和三十年十一月三十日 初版發行
定價九百五拾圓

譯者 柴田天馬

發行者 秋山修道

印刷者 中内佐光

發行所 株式會社 修道社
東京都中央區日本橋小舟町二丁目四番地
電話茅場町(66)一七三四、四〇八三番
振替口座(東京)六一六九一番

落丁、亂丁のものはお取替へいたします。

凸版印刷・鈴木製本

目次

紅玉……三
元少先生……一四
汪可受……一七
募緣……二〇
偷桃……二六
布客……三一
頭滾……三五
阿繡……三六
姬生……四九
周生……西
周克昌……五七
泥鬼……六〇
水莽草……六二

長清僧……六九
陽武侯……七三
陸押官……七七
閻羅宴……八二
王十……八四
鬼作筵……八九
馬介甫……九三
役鬼……一一一
羅祖……一一三
菱角……一一五
紅毛氈……一二一
邢子儀……一二三
查牙山洞……一二七
老龍船戶……一三一
司文郎……一三五
雛鶵……一五一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

蔣太史……一五四
霍女……一五六
孫必振……一七一
賭符……一七二
王六郎……一七五
犬燈……一八三
聶政……一八六
獅子……一八八
長治女子……一八九
馮木匠……一九四
阿寶……一九七
番僧……二〇六
白蓮教……二〇八
木雕美人……二一三
某乙……二一三
顧道人……二一九

海公子……二二二
諸城某甲……二二五
酒蟲……二二七
古瓶……二三〇
于去惡……二三三
眞定女……二四六
席方平……二四七
黑獸……二六〇
郭生……二六二
閻羅薨……二六六
荷花三娘子……二七〇
果報……二七九
果報二……二八〇
酆都御史……二八一
牧豎……二八四
竹青……二八六

新鄭獄……二九三
顧生……二九六
畫皮……三〇〇
紫花和尚……三〇八
楊大洪……三一〇
祝翁……三一三
綠衣女……三一五
王貨郎……三一九
九山王……三二一
司札吏……三二七
甄后……三二九
喬女……三三六
毛狐……三四一
狐女……三四八
韓方……三五一
畫壁……三五四

侯静山……三五九
段氏……三六一
王者……三六六
黎氏……三七二
雷曹……三七六
鞠藥如……三八四
胡四相公……三八五
僧術……三九三
劉夫人……三九六
雨錢……四〇九
花神……四一二

扉・挿畫　福田貂太郎

定本聊(れう)齋(さい)志(し)異(い)

卷五

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

紅玉

廣平の馮翁と、字を相如といふ其の一人子とは、父子とも秀才で、翁は年が六旬近い、方正い性の人だつたが、家は屢も空をしてゐた。母と子の婦とが相繼いて逝んだので、井しごとや臼などは、自分で操なければならなかつた。

ある夜、相如が月下に坐つてゐると、東隣りの女が、牆の上から首をだして窺いてゐた。視ると美しい女である。近よつてゆくと微笑した。手招きをしたが、來もせず去きもせぬのだ。固く請ふと、梯で牆を過えてきたので、たうとう寢處を共にした。姓名を問くと、

「あたし隣りの女の紅玉です」

といつた。相如は大そう愛好になつて永好の訂をしてくれといふと女は諾したのである。

夜々往き來をして、約れ半年ほどすぎたが、ある夜、翁が起きて、子の舍の笑ひ語を聞き、窺いて女を見ると、怒つて相如を外に喚び出し、こゑをふるはせて罵るのであつた、

「畜生！　何といふ所爲だ。如此に落寞ても、尙だ刻苦せずに、浮蕩な學をするか！　人が知れば汝の德を喪ふし、人が知らんでもおまいの壽を促めるぞ」

相如は跪いて自投つた。後悔しますといつて泣くのであつた。翁はまた女を叱つた、

「女は不守閨戒であつてはならんのだ。自分を玷した而又復、人を玷した。倘し此の事が一發たら、寒舍の羞になるばかりではありませんぞ」

翁は罵りつけると憤然しながら、室に歸つて寢てしまつた。女は涕を流して曰つたのである、

「親庭さまのお罪責をうけて、あたし良足愧辱いわ。我兩人の緣は盡きたのね」

「父がゐるのだから、自專にはならない。しかし卿にその情があるんだつたら、含垢して、情好をつづけてゆかうぢやないか」

女は何うしても決絶るといつて、相如の灑涕のを止め、

「あたしと君とは、媒妁の言も、父母の命もなく、踰牆鑽隙たんだから、共白首まで添ひとげられないのが、當りまへだとおもふわ。此處に一人佳い耦があるから、それをお聘ひなさいね」

相如は、貧乏だから聘ふ金がないと曰つた。

「來の宵、俟つてらつしやい。あたし君のために謀するから」

次ぎの夜、女は約束した果に忍んできて、四十兩の白金を相如に贈つた。そして、

「此處から六十里さきの吳村の衞氏に、十八になる女があるの。結納の價が高いので未だ售れないんです。君が重かねを啗れば、必合と諧允るわ」

と言つてしまふと、別れて去つたのである。相如は乘間て父に語した。相に往かうといふのだ。しかし、女から金を饋られたことは隱して父には告げなかつた。父は結納の金がないのを自度へて止せとい

つたが、相如は、

「なあに試可乃已のことですよ」

と婉く父を説きつけ、父が頷くのを見ると、急いで僕の者や馬を假りて、衞氏の家に詣つたのである。

衞は故からの田舍翁だつた。相如は衞を外に呼び出して閑語をしたのだが、衞は相如の望族なのを知つてゐたし、儀采の軒豁なのを見て、心では結婚を許しながら、相如が貲を斬むのではないかと、それを慮するのであつた。相如は翁の詞意呑吐を聽いて其の旨を會り、囊を傾けて金を几の上に陳べた。すると、衞は喜んで、隣りのひとを溷んで間に居て、紅い箋に盟を書いて緣談をきめたのである。相如は奥に入つて媼を拜したが、居室は偪側かつたから、女は母に依りそつて身を障してゐるのであつた。微と睨ると、布ものに荆のかんざしといふ飾ではあるが、姿は勿論、神情が光豔くやうに感ぜられるのを、心竊かに喜んだのである。衞は自分の家が狹いので、急に舍を借りて婿を款し、

「あんた、親迎などは無須ことです。少し衣妝を作つて、舁で送つてゆくのを待つてゐてくだされ」

と言つた。相如は期を訂めて歸つたが、翁には詭つて、

「衞はうちの清しい門が喜だから、貲は不責といひましたよ」

といつた。翁はそれをきいて、ひどく喜んだのである。

その日が至ると衞は果して女を送つて至た。

女は勤儉で順德かつた。琴瑟も甚篤く、二年たつと男の子が擧て、福兒と名づけた。

會それは清明の節句である。妻は子どもを抱いて登墓をする途中、宋といふ邑の紳士に遇つた。宋は御史の大官だつたが、行賕の罪で免職になり、今は林下に居んで、大擄威虐てゐる、たちのよくない人だつた。その日、宋もやはり墓に上つた歸りに女を見て、艶しいとおもひ、村人にたづねて、相如の配であることを知つた。彼は料へたのである。馮は貧乏な士である、重な金を賂つて誘惑すれば、其の心を搖かすことができるだらうと。で、家人にいひつけ、風く示はしてみた。驟にそんなことを聞いて、相如の顏には怒りの色が形はれたが、不敵相手だと思ひなほして、怒色を斂め、笑がほをつくつて歸つてきた。そして翁に告すと、頑固な翁はひどく怒つておもてに奔け出し、そこに待つてゐた宋の家人に對ひ、天を指し地を劃して萬端に辱罵つた。家人は鼠竄にげ去せたが、尾鰭をつけて主人に報告したので、宋は怒つて數人の家人を遣り、馮家に亂入して馮と相如を毆らせた。鼎の沸くやうな洶である。女はそれを聞くと、兒どもを牀に棄し、髪を披して救ひを號んだが、群はそれを纂昇いで、閧然と去つてしまつたのである。

馮父子はさん〳〵に傷殘を負ひ、地に倒れて呻吟つてゐるし、兒どもは室の中で、呱々と啼きさけんでゐるのを、隣人たちは憐れんで、半死半生の父子を、榻に扶けあげたのである。

日を經て相如は杖にすがつて起つやうになつたが、翁は忿つてものを食はず、尋て、血を嘔いて斃んでしまつた。相如はひどく哭いて、子どもを抱いて輿詞へた。上は眷撫に至るまで、幾徧る役所に訟へたのだが、直しいさばきをうけることが得きなかつた。後になつて聞くと、婦はみさをを屈ずに死んだのである。相如は益々悲んで、寃みが塞胸吭へながら、それを伸すことができないのだ。路に要けて宋

を刺し殺さうと毎も思ふのだが、彼には扈從が繁いし、兒どもを托む人は罔し、日夜哀しい思ひをして、双睫を交すこともなかつた。

忽、あるとき、一人の丈夫が彼の室に弔にきた。虬のやうな髯をはやし、闊い頷をした偉丈夫で、まつたく無素ひとである。坐つて邦や族をきかうとすると、客は遽いふのだつた、

「君には父を殺した讎、妻を奪はれた恨がある。その報復を忘れたのか」

相如は、客が宋のために偵察にきたのだらうと疑つて、姑僞な應をした。すると、客は怒つて眦欲裂せ、遽く室を出ながら、

「僕は君を人らしい人とおもつてきたのだが、齒るに足らぬ傖だといふことが今わかつた」

といつた。相如は彼がたゞものでないのを知り、跪いて挽きとめたのである、

「實は宋家の人が僕を餂にきたのだらうとおもつたのです。腹心のなかを實佈れば、僕が臥薪嘗膽つてゐるのは有日ことなのだが、たゞ此の褓中物が憐さうなのと、宗祧の墜るのを恐れて今日に及んだ。君を義士と見かけて賴む。僕の爲に杵臼と爲つてくれないか」

「それは婦人女子の事で、僕にはできない。君は人に托まうとおもふことを、自分で任ろ。君が自分で任らうとおもふことは、僕が代庖らう」

それを聞いた相如が角を地に崩けて感謝するのを、客は顧もせずに出てゆくのだ。相如は追つて出て姓字をきいたが、客は、

「濟なくても怨まれたくはないし、濟ても德がられたくはない」

といつて立ち去つた。相如は禍ひの身に及ぶのを懼れて、子どもを抱いて亡去せた。

夜になつた。宋家一門の者が俱な寢しづまつたころ、幾重もの垣を乘り越えて入つてきたものが有つて、宋御史父子三人と、婢一人、媳一人を殺してにげてしまつた。宋家が狀で官に告へたので官は大く驚いたが犯人は相如だと宋家で執謂ので、相如を捕へに役を遣ると、相如は遁げて所之がわからなかつた。それで、事情は益々眞らしくおもはれるのであつた。

宋家の僕たちは官役と同に諸方を冥捜し廻つて、夜、南山に至ると、兒どもの啼きごゑが聞えた。其の聲を跡けて、たうとう相如を得へたが、繫縲つてつれて行くうちに、兒どもが啼愈嗔るので、

「やかましい餓鬼め！」

といふと、兒どもを奪つて拋げ棄てた。相如は絶ぬほど寃憤つたが、どうすることもできなかつた。

邑令にあふと、邑令は、

「何うして人を殺したのだ」

と問いた。

「寃罪です。某は夜死んだので、わたしは臺村を出ました。且に呱々を抱いてゐるものが、何うして垣を踰えて人を殺すことができませう」

「人を殺さぬのに、何ぜ逃げたのだ」

相如は詞に窺つて置辯ができなかつた。で、獄に收れられることになつた。相如は泣いて、

「わたしは死んでも惜しいとは思ひません。孤兒に何の罪があるのですか」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com